

“地産保”発展に貢献 職域と地域の 健康を目指す



医療法人慈健会 須田胃腸科外科医院 理事長 須田健夫さんに聞く

古くは武蔵一の宮である氷川神社の門前町として、また、中山道の宿場町として繁栄してきた大宮（埼玉県さいたま市）。現在は、東北、山形、秋田、上越、長野の各新幹線と在来線6路線が乗り入れる鉄道の要衝として、また、旧国鉄時代から続くJR大宮工場や平成19年にオープンした鉄道博物館などを有する鉄道の町として栄える。平成13年、さいたま市大宮区となった現在も、県下屈指の商業都市として発展している。

平成5年、同地に設立された「大宮地域産業保健センター」。初代副センター長に就任した須田健夫さんは、「これが、産業保健活動に、より足を踏み込むきっかけになりました」と、当時を振り返る。以来、埼玉産業保健推進センターの相談員をはじめ、埼玉県医師会や大宮市医師会などで産業保健関係の要職を務めることに。

さて、須田さんが産業保健活動にのめり込むきっかけとなった大宮地域産業保健センターは、県内の地域産業保健センターの中でも抜群の利用実績を挙げ、地域の小規模事業場の産業保健活動に大きく貢献。発足当初から、その活動を間近に見てきた須田さんは、その秘訣について、「コーディネーターの努力によるところが大です。われわれはコーディネーターの振付に従うだけです」と謙遜するが、須田さんの尽力は想像に難くない。

嘱託産業医、かかりつけ医として奮闘

須田さんは、明治44（1911）年に祖父が開設した須田医院の後継者。祖父と父は、二代にわたって産婦人科を専門としていたが、須田さんは外科を専攻。昭和60（1985）年には病院を須田胃腸科外科医院としてリニューアルし、地域の“かかりつけ医”として活躍中だ。その一方で、産業医として地域の企業における産業保健活動を意欲的に展開している。

そもそも須田さんが、産業医を意識したのは1980年代前半のこと。周囲から、「これから産業医は必要になる」とのアドバイスを受け、日本医師会認定の産業医学基礎研修を受講したのが、産業医としての出発点。とはいえ、当時は開業医としての仕事が多忙を極めていたため、産業医活動は事後措置が主体だったようだ。

しかしその後、企業の産業保健に対する関心の高まり・ニーズの高まりは、須田さんを本格的に産業保健の世界に引っ張り込むことに――。

須田さんが現在、産業医として特に熱心に活動するのは、印刷会社とエレベーターの保守・管理会社、文具雑貨販売会社の3社。印刷会社は、隣接する市の工業団地の一角にあり、同社の会長と須田さんとは20年来的の付き合い。当初は、「たまに来てくれるだけで構わない」という程度の依頼だったが、須田さんは「やるからには、ちゃんとやります」と宣言。本格的な産業医活動をスタートさせた。

周知のとおり、印刷業務では有機溶剤が不可欠。職場巡視では、その対策に重点を置いた。これまで同社では、蓋付きの容器に有機溶剤を入れ、現場で使用していた。しかし、その蓋は密閉性がないために、溶剤の臭いが現場に漏れ出ることもしばしば。そこで、須田さんは現場の関係者と協議し、“大型のサランラップ”を用いることを提案。以来、現場から溶剤の臭いが消えたという。「大がかりな設備の改善という手もありますが、それは中小企業では現実的ではありません。お金をかけないで、改善できる方策を模索しました」と、現場の実態を踏まえた取組みの一例だろう。

健診結果には赤ペンと付箋で指示

エレベーターの保守・管理会社では、毎月開催される安全衛生委員会に出席、健康講話などを行う。

同社については以前、安全衛生委員会の開催時間が須田さんの病院での診療時間と重なるなど、十分な産業医活動ができなくなったことから、産業医を辞したことがある。しかし、会社側が委員会の開催時間を変更するなど、須田さんへの配慮を行ってくれたことから再び産業医に就任。須田さんに対する会社側の信頼や期待を物語るエピソードだ。

当の須田さんは、「夏季には熱中症について、冬季にはインフルエンザについてなど、時宜に合った話題の講話を行うよう心がけています。また、毎回、安全や衛生上の注意事項も指摘しています」と、会社の期待に応えようと懸命だ。さらに、「産業医として現場の作業状況も見たいところですが、さまざまなビルや施設のエレベーターが現場ですから、そうもいきません」としつつも、「事務所の巡視を予定しています」と、たとえ活動を行う上での制約があったとしても、新たな活動の場を見出し、果敢に挑戦する。

また、文具雑貨販会社では、職場が病院近くのデパートのテナントであることから、時折ふらりと訪れては、バックヤードの状況などを確認。「こんなところに荷を置いていたら、火災の時には危険だよ」など、幅広いアドバイスを行う。当然、産業医としての活動、例えば非喫煙者の休憩室と喫煙コーナーの設置位置などの分煙状況の確認などについても怠りはない。

これら3社で実施した健康診断の結果のうち、特に再検査者や要観察者については、来院を求めて検査や指導を実施している。また、診断結果を従業員に戻す際には、結果表に赤ペンで注意事項を記入するとともに、従業員の関心を惹くために付箋を貼りつけるなどの工夫も行っている。

このように、会社との信頼関係を構築し、積極的な産業医活動を展開する須田さんだが、苦い思い出もある。

それは、ある電子機器メーカーの嘱託産業医を務めていた時の出来事。ある日、同社の担当者から、「埼玉県以外の地域の事業場の面倒も見てほしい」との依頼が。須田さんは、自身の病院での診察との両立など、悩んだ末に結局、同社の産業医を辞すことに。同社の専属産業医と上手く連携できなかったことが、今でも悔やまれるという。

願いは職域と地域医療の懸け橋

地域の“かかりつけ医”として、また、複数の企業の嘱託産業医として、多忙な日々を送る須田さん。会社の健診結果を見て常に思うのは、“有所見者が、自分が指導したとおりに再検査を受診しているかどうか”ということ。産業保健推進センターなどの講演においても、常に締めくくりとして「健診データが埃をかぶっていませんか?」と訴え、健診の“やりっ放し”に警鐘を鳴らしている。

その背景にあるのは、「専属の産業医ならば、社命として指示できますが、嘱託の産業医だと限界があります」という、これまで幾度となく経験した歯がゆい思いだ。

そんな経験から導き出され、須田さんがモットーとするのが、“職場から地域へ”。「職場で働いていた方は、いずれ職場を去って地域に戻ります。職場で蓄積された健診データは職場に留まるのではなく、地域医療に引き継がれる必要があります」と、職域と地域医療との連携の必要性を指摘する。さらに、「臨床医として、産業医として、常に自分に問いかけしながら取り組んでいます」と語る須田さん。かかりつけ医と産業医の二足のわらじは職域と地域医療の架け橋を目指して前進している。